

十月例会

昭和四十九年十月十五日(火)
於 テイジンホール(大阪市)
商都大阪の心臓部「船場」...



日本国中かくれもないその船場のどまん中へ我等の「帝人」が、どっかと本拠の根を下したのである。
昭和四十九年五月、南本町一丁目十七階建の目を見張る様な荘麗極りない白亜の巨大ビルが出現した。

と云うのはこの「大帝人ビル」には他に類例のない華麗な「劇場ホール」が設けてあつて、そのホールはビルの竣工披露の当日、片岡仁左衛門が寿三番叟を踊つて「柿茸落し」したと云う日くつききの立派なものである。このホールを利用してあらうて、去る六月二日、朝日テレビが放映した「歴史を旅する」シリーズの内の、金子直吉伝を再上映し様と云うのである。これが今回のメインイベントである。午前十一時、既に殆どの顔が揃う。五月の全国大会以来早くも五ヶ月余りも経過したが、この間逢うて別れたばかりの様に思われ変らぬ元気を喜び合う声が随所で交される。高畑さん、永井さんを取りまく群々が静かな波動を繰り返して乍ら除々にロビーからホールへと移動して行く。三百三十人収容の大ホールを埋めるには少し集りが少ないがそれでも帝人自慢の絢帳がする／＼と上る頃には破れる様な喝采がどよめいた。高畑さんは今日午前中に何うしても日商へ行かれねばならぬ用件があるのでプログラムの順序を変更して真つ先に登壇してもらふ事にした。何時にも変らぬ元気な声で世界を論じ世相を憂え、会員諸氏の健康を願望して熱弁を駆使される。



舞台のバックを飾る「扇」の大のれんは、今日は自家秘蔵の家宝を拝借した物で和やかな空気の中にもぴんと張りつめる様なものが漂う。そして大幡さんは含蓄のある鈴木商店と帝人の創生期を語り、折角の時に大屋社長が海外出張中で欠席のため画龍点睛を欠く残念を述べて開会の挨拶とされる。続いて小倉幹事の登壇何時もの名調で事細かに行き届いた会務を報告、十五周年記念事業としての故西川文蔵氏頌徳碑建立企画のあらまし、来年一月の例会行事、喜寿大杯の贈呈者名簿(別項所載)そして最後に物故者に対する黙禱を一同と

共にして降壇。これにて少憩する。再び絢帳が下りて舞台装置が一変すると今度はスクリーンが一杯に広がって居る。愈々、フィルムやVTRの映写である。先づ第一部は「帝人ビル」着工より竣工迄の記録映画、机上プランから始めて着工迄の準備、工程の進歩等ワイドに映し出される迫力は近代建築の豪華とメカニズムを詳細に書き出し、絢らんさに目を奮われ精密極りないコンピュータシステムに感嘆を久しうする。大屋社長が画面からクローズアップされて意図を述べられ、これで今日欠席のマナスが埋められた様に感じ大きな感銘と認識を深めて第一部の観賞を終る。次いで、第二部は、既に多くの人々がテレビの画面で一度は見られたであろう金子直吉伝である。新日本金属の上田五郎社長の御近親が偶々、このシリーズ物を担当せられ、太陽鋳工を通じて度々取材行の苦心を重ねられた傑作。我々にとっては見逃す事の出来ないそして二度も三度も見度い映画である。上田氏を通じて朝日テレビよりVTRを借り出し、帝人ビル側に懇請して漸く再映にこぎつけたのである。さてテレビとは比較にならぬ大きな画面の迫力には圧倒されそうなきさま

じさに固唾を呑む。画面の冒頭は米騒動の変に始まり、鈴木商店の躍進時代を順序よくまとめ、その立役者たる金子直吉翁の少年時代から大成迄を興味深く演出して行く。その傍線解説を神大の桂芳男助教授が専門の立場から克明に補足される。金子武蔵、高畑誠一、大屋普三の諸氏が翁の偉大なる事蹟を多角面から語り、歴史に燦たる鈴木商店の国家的事業と貢献を称揚される。満座は之「扇」マンとその流れを汲むゆかりの人々ばかり、この記録映画に特殊な親近感を抱いたであろう事は必条である。場内が明るくなるとほととしたため息が其所彼所でもれる。改めて大きな感銘が湧き上る様であった。さて今日の午饗は帝人ビルの御好意に甘えて社員食堂を使わせてもらふ事にした。云うなれば「一日帝人社員」となつて社内の空気にもふれ建屋の端々にも何がしかの印象を止め度いのが偽りのない気持である。社員食堂は十七階のスカイフロア一で三方総ガラスの窓からは大阪市内が一望の元に収められる。一寸したセルフサービスも時に取つての一興で却つて歓が盛り上がる。同じ階に広いロビーがあり食事の後も三々伍々茶話の時間が続いて

辰巳会十月例会出席者名簿

昭和四十九年十月十五日
於大阪 テイジンホール

Table listing attendees with columns for names and names of accompanying persons. Includes names like 阿部立孫, 足立正人, 天羽正吉, etc.

会務報告

小倉 五郎

今回は会務報告と申しましたが、取り立て、申上ぐる事項も御座いませんので、天上で鬼が笑うかも知れませんが、来年の行事の予告編とでも云つた様な事を申し上げ度いと存じます。御承知の通り来年は辰巳会創立十五周年に当ります。そこで五月の全国大会にはそれに相応しい事業なり催しを実施し度いと考えておりますが、現在の所之は未だ日もありません関係上、何等具体案は出ていませんが、その一端として差当り来春の例会、現在の処一月二十一日と予定しておりますが、本春同様神戸生田神社の生田会館に於いて会員全物故者の慰霊祭を神式にて取り行いた

いと予定しております。尚、当日は島根県無形文化財である出雲神楽が神社側から提供され年頭の悪魔払も取り行う事になるでしょう。何れ改めて御案内は申し上げますが、その節は御繰り合わせの上是非御来場賜りますようお願い申し上げます。御承知の通り従前から色々の論議はありましたが、本会は発会以来特別賛助会員、賛助会員の強力なる御支援、御庇護の下に運営されて今日に至りました。尚一般会員からは原則として例会等の当日会費以外は何等拠出を願つておらない訳でありまして、今後も亦この方針を堅持し度いと存じておりますが、何分にも御承知の狂乱物価の今日この頃の経済下でありますので、会員の運営も亦容易か、さるものがあることは御推察頂けると存じます。就きましては、会誌「たつみ」購読費でもお考え頂いても結構ですし、又辰巳会年会費とでも御解釈願わしく、年賀と暑中見舞、広告何れも二千円でありまして本会の円滑なる運営の為、又「未だ老骨健な